

第7章 両極打法を用いたサヌカイト剝片の特性

はじめに

千里丘遺跡では、平成17年度から都市計画道路千里丘三島線沿いを、JR千里丘駅のすぐ側から東へ向けて順次4ヶ年にわたって調査をおこなってきた。その初年度次に、調査区の北東隅近くの北壁地層観察用に残した畦内において、サヌカイトの石器剝片の集石を検出した（図1）。170点を超える剝片がぴったりと重なり密着した状態であった。ここでは、そのサヌカイト石器集石遺構及び石器剝片について若干の考察を述べることにする。

1. 検出状況について

平成17年度調査成果の概要については既刊の概要・報告書（註1）を参照されたいが、ここでは石器集石を検出した層序と遺構面について簡単に振り返りたい。

千里丘遺跡では最も遺構が集中するのは12～16世紀頃の中世であり、鋤溝をはじめとする耕作の痕跡が中心である。しかしながら、この石器が出土したのはさらに下層の地山直上の最終遺構面においてである。当該調査において、この遺構面では、古代の掘立柱建物やピット、耕作の痕跡などを検出している。また、同遺構面の主な出土遺物は古代の土師器・須恵器の小片であるが、石器の出土地とはかなり離れているものの同調査区の他の出土土器とは全く様相を異にし、縄文土器の可能性も考えられるような著しく摩耗した小土器片も出土した（註2）。

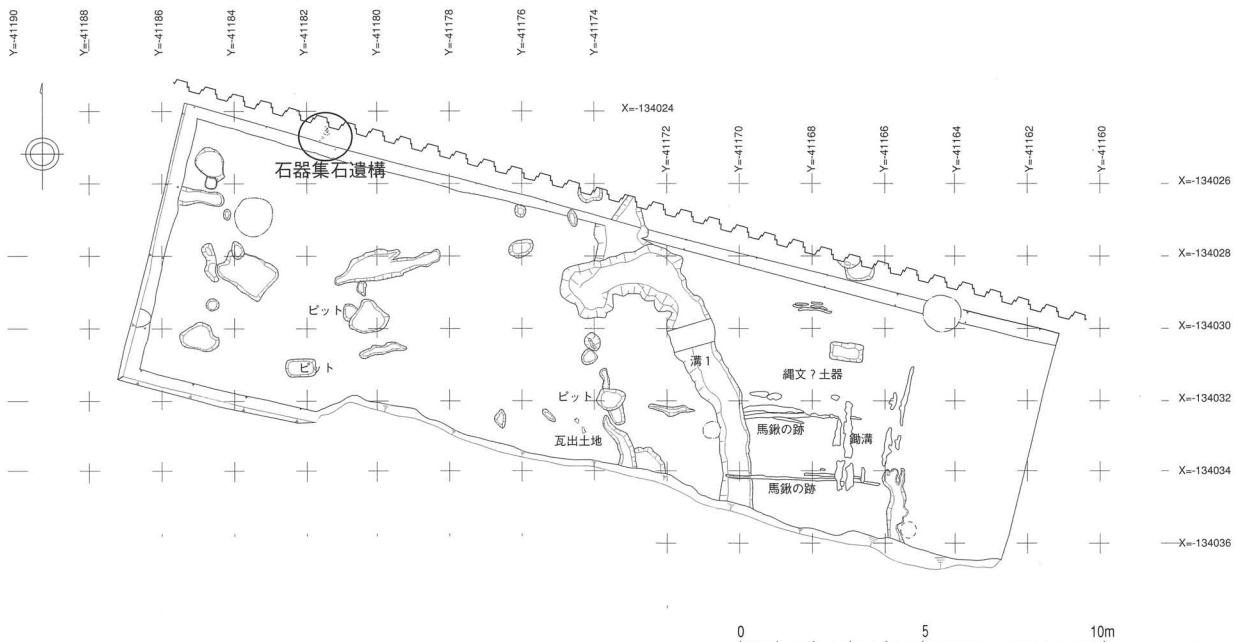


図23 平成17年度調査区 最終遺構面 遺構平面図及び石器集石遺構位置図

そのため、古代よりいっそう古い時代の遺構・遺物が存在する可能性はここからも示唆される。

この石器剝片は平成17年度調査区で7層と呼ぶ地層の上部において出土した。その上面である第3遺構面において、16点を検出していた。それらを取り上げ後、明瞭な掘り込みではないが、ピット状にやや窪地となった中にレンズ状に堆積した状態で出土した（図24）。T.P.+8.6m付近において、ねばねばして赤みを帯びた黄褐色粘土の上層で検出し、堆積は最大径が約25cm、中心部の厚さは約9.3cmであった。チップ状の碎片をのぞいて、主だったもので170点以上を数える。

数メートルを隔てて西に隣接する平成18年度調査区内においても、同様の石器片が出土する可能性を想定し、対応層では注意深く検出作業をおこなったが、ここでは1点の剝片も出土することがなかった。

出土石器の整理・検討をすすめるにあたって、石器の出土した層序についてより詳しいデータの必要性を感じ、その再確認をおこなうために平成18年度調査時に、対応層から土壤サンプルを採取し、詳細な観察をおこなった（註3）。7層の直上に堆積する6層に相当するサンプルからは、比較的多量の褐色火山ガラスがHタイプ・Cタイプ（註4）ともに存在し、他の層から採取したサンプルと比べると火山ガラスの含有量が圧倒的に多かった。褐色ガラスは鬼界アカホヤ火山灰（約7,300年B.P.）に特徴的な含有物である。7層においては、褐色ガラスとともに角閃石の単結晶が多く観察できた。これは、近畿地方で確認される火山灰のなかでは阪手火山灰（約1万数千

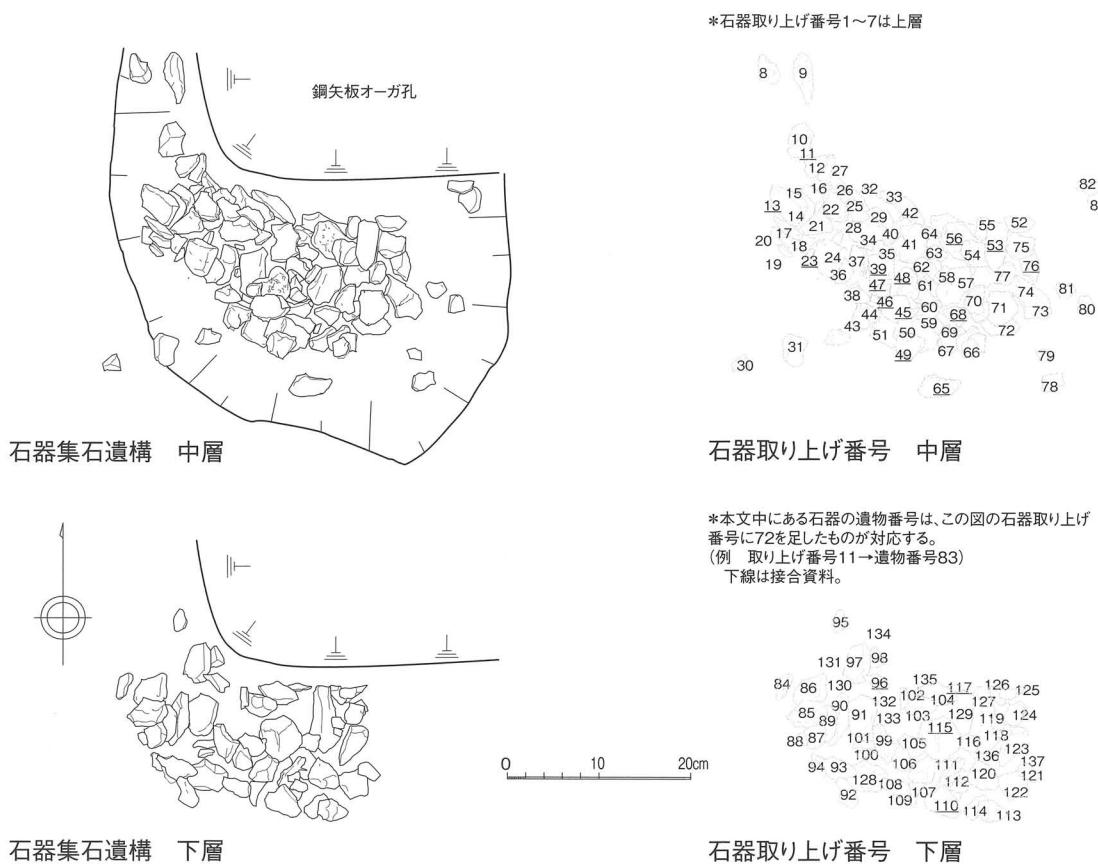


図24 石器集石出土状況図

年BP)に特徴的な鉱物である。この結果、各々6層にはアカホヤ火山灰、7層には阪手火山灰が含まれている可能性がある。

しかしながら、どちらもいわゆる火山灰層として認定できるほど多量の火山碎屑物を含んでいたわけでも、排他的に一種の火山灰のみが存在したわけでもない。そして、7層のサンプルは残念ながら石器集石のまさに検出地から採取したものではなく、対応層から採取したものである。このため、これを根拠に6・7層及び石器集石の絶対年代を断定するにはいささか根拠が弱いため、ここでは、各々の火山灰が堆積の中に含まれることを考慮し、平成18年度調査の報告においても6・7層は各々当該年代に堆積した可能性があり、石器剝片出土層はアカホヤ火山灰の降灰以前に堆積した可能性がある、というにとどめておく。

アカホヤ火山灰の降灰した7,300年前は縄文時代の早期にあたる。ここでは明確に時期のわかる遺物を共伴しておらず、通有の縄文時代の時期区分に当てはめることはできないが、後によりあげる他遺跡の遺構との類例比較の目安として掲げておく。少なくとも、このような検出状況により、石器集石は千里丘遺跡において通常みられる遺構・遺物と比較して、際だって古い時期に形成されたものである可能性が示された。そしてそれは、摂津市域やその周辺の遺跡ではこれまでみられない時代及び類の遺構であり、この地域における遺跡形成の起源をたどる意味でも非常に重要なものであることがわかる。

2. 千里丘遺跡出土サヌカイト石器剝片の概要

集石遺構内の剝片は、小さいものを合わせると200点を超える。主だったものの一部を図化したものと、各々の剝片を計測したデータ一覧を掲載する。ここでは、2cm以下の碎片・破片60点あまりをのぞいた178点を考察の対象とする。

肉眼観察から、出土した石器はすべてサヌカイト製であるが、香川県金山産のものはみあたらず、ほぼすべてが奈良県二上山産のものであると考えられる。一般的に二上山産のものの方がきめ細かく、金山産のものは全体的に白っぽく、白く粗い粒子も含まれ、フィッシャーの周りにもざらついた白っぽいしわが走るというが、本出土遺物にそのような状態はない(註5)。また、すべての剝片の剥離面が白く風化し、剥離面と自然面との色合いにほぼ差がないほど摩耗している。

この一群の剝片の組成については詳細なデータを後に提示するが、ほぼ9割以上が両極打法を用いて割られたものである。両極打法とは、比較的扁平な台石に石核や原石をのせ、上からハンマーで打ち碎く挟み打ちの手法で、上から打ち下ろす力と、下方で台石とぶつかる力とによって、打点が上下2点に生じる。そのため、剝片の上下ともに打ち碎く痕跡が残るのが特徴である。この技法を用いて剥離されたものは、「楔形石器」・「ピエス・エスキュー」などと呼ばれる(註6)。岡村道雄氏はこの両極打法を用いて加工された石器に顕著な諸特徴を指摘する(註7)。例えば、上方からの打撃による力の伝達と下方の台石から反作用によって伝わる力とが、縁辺部に階段状の剥離痕を残したり、内部で食い違ったところで割れを生じさせ剪断面を形成したりするもので

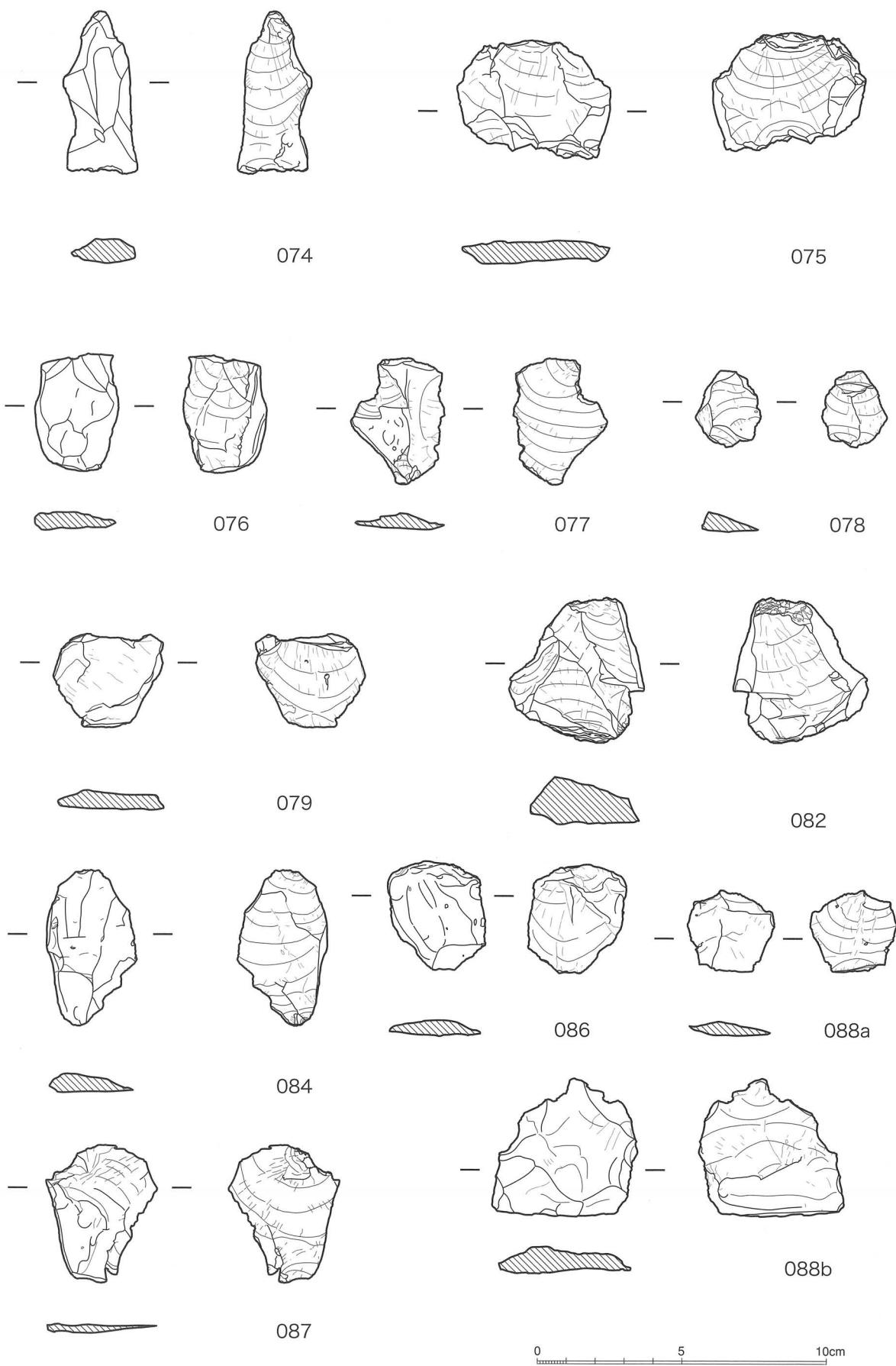


図25 出土石器剥片（1）

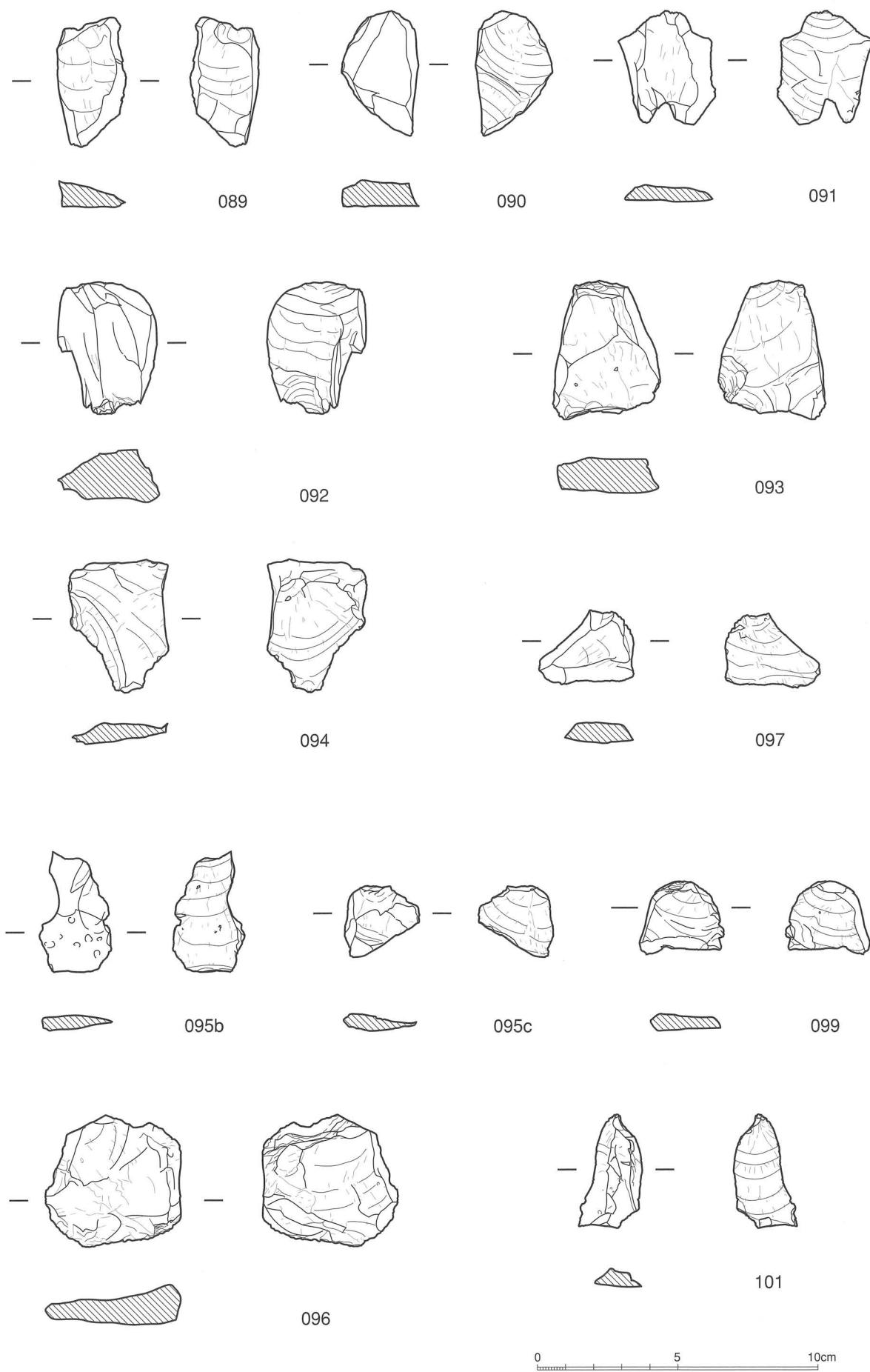


図26 出土石器剥片（2）

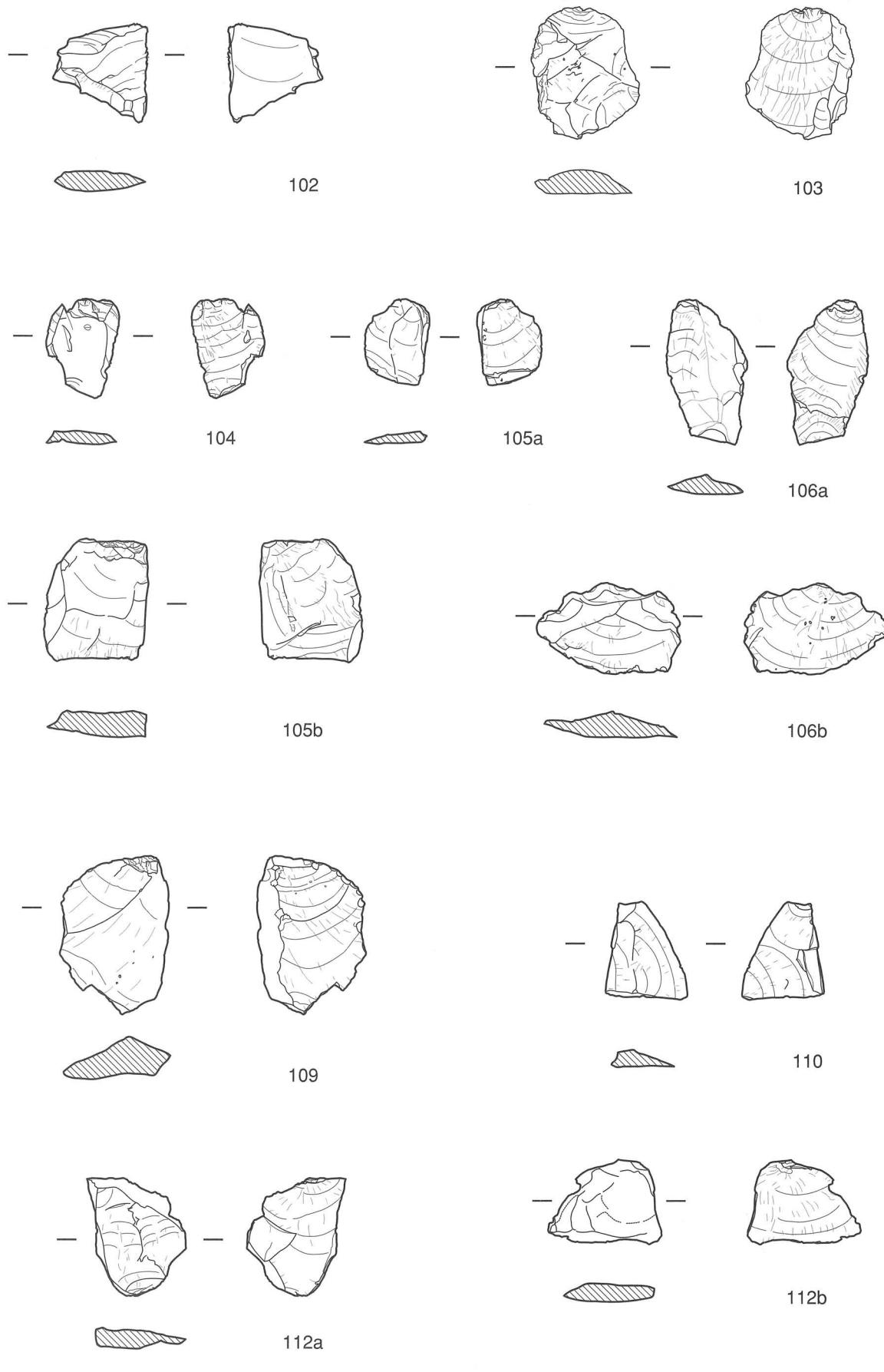


図27 出土石器剥片（3）

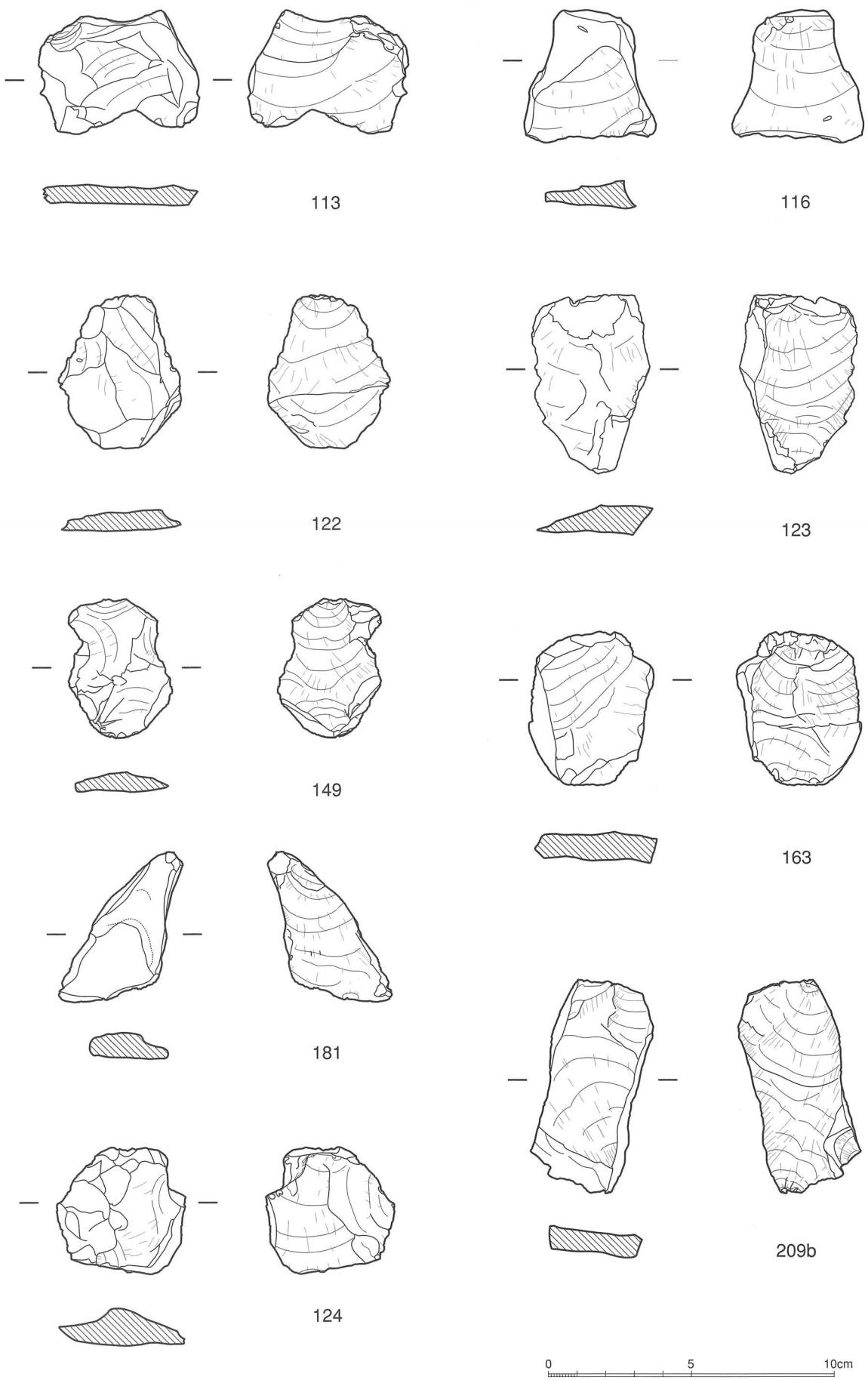
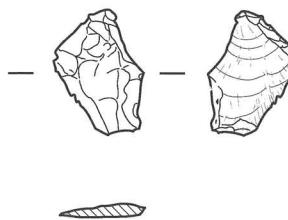
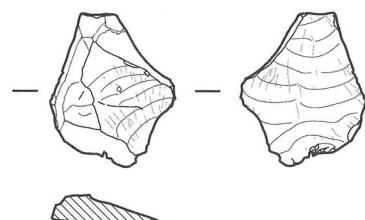


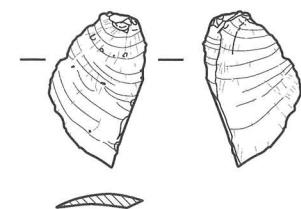
図28 出土石器剥片 (4)



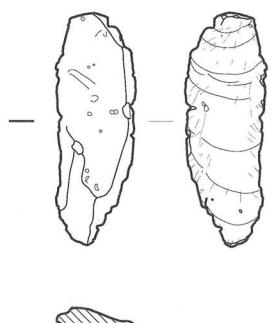
接合資料① 119



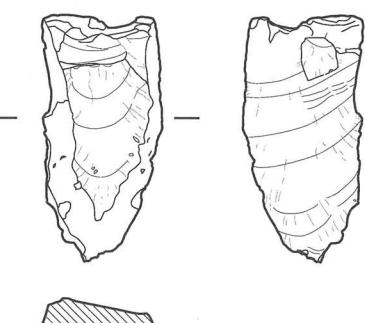
接合資料① 121



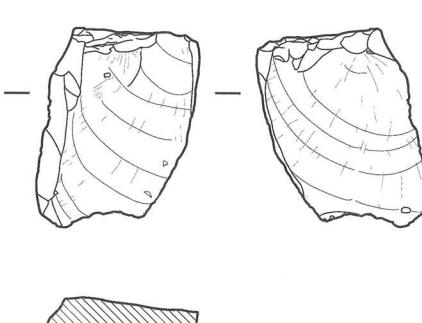
接合資料① 095



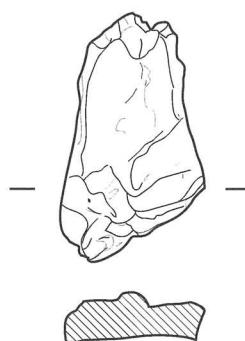
接合資料⑨ 162



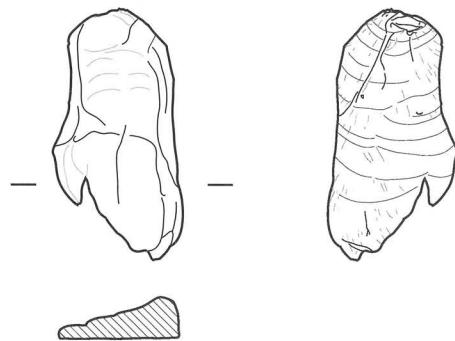
接合資料⑨ 125



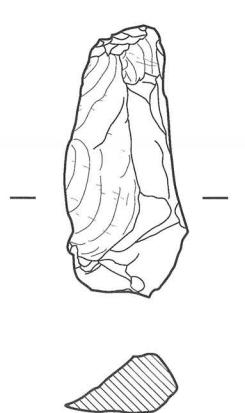
接合資料⑨ 085



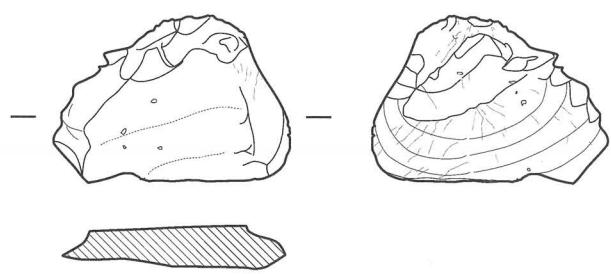
接合資料④ 137



接合資料④ 111



接合資料⑧ 148



接合資料⑧ 120b

0 5 10cm

図29 出土石器剥片 接合資料

ある。これらはともに、千里丘遺跡例にも多く観察できるところである。その他にも、平面形が四辺形を呈することが多く、剥離面の湾曲が少ない、バルブが平坦で散漫であることなどがあげられる。

一方出土状況は、隙間も、間に土が入ることもなく密着した状態であったが、接合資料は少なく、9例のみであった。それらも、3点が接合するものが4例、残りの5例は2点の接合で、合計24点のみである（註8）。ただ自然面を残すものや、剥離面が著しく風化したパティナをもつものが多く、出土した剥片は原礫からそう繰り返し加工された状態ではないようにみえる。次項でその組成の詳細を述べる。

表3 出土石器の分類

記号	石器タイプ	分類	数量	比率 (%)	備考
A	クサビ形本体	長さが3cm以上4cm未満	3	1.6	
B	クサビ形本体	長さが4cm以上5cm未満	13	7.3	
C	クサビ形本体	長さが5cm以上6cm未満	4	2.2	
D	クサビ形本体	長さが6cm以上	15	35	8.4 19.7
E	クサビ形剥片	長さが2cm以上3cm未満	30	16.9	
F	クサビ形剥片	長さが3cm以上4cm未満	41	23.0	
G	クサビ形剥片	長さが4cm以上5cm未満	23	12.9	
H	クサビ形剥片	長さが5cm以上	20	114	11.2 64.0
I	クサビ形剥片	長さが3cm以上4cm未満	4	2.2	
J	クサビ形削片	長さが4cm以上5cm未満	7	3.9	
K	クサビ形削片	長さが5cm以上	4	15	2.2 8.4 クサビ形 総計 164点・92.1%
L	剥片	長さが4cm未満	5	2.8	
M	剥片	長さが4cm以上5cm未満	5	2.8	
N	剥片	長さが5cm以上	3	13	1.6 7.3 剥片 総計 13点・7.3%
/	クサビ形石器	完成品	1	1	0.6 0.6 分析対象外
/	碎片	長さが2cm未満	約60		

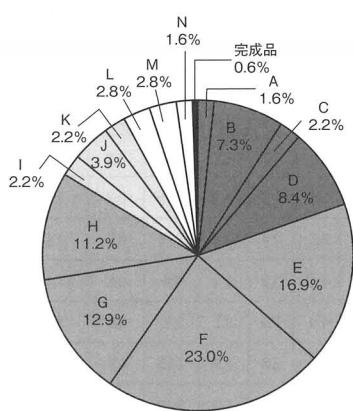


図30 出土石器のタイプ別組成

3. 石器の組成

集石遺構内のサヌカイト石器剥片のデータをここにあらわす。腹面の剥離時に打点が生じる上下を縦方向として長さ、それに直交する方向の最大値を幅と仮定して剥片の法量を計測したものがこれらの一覧である（表4～6）。両刃ともに2cm以下の碎片・破片約60点を除く178点を分析対象とし、その計測データを元に分類をしたもののが組成の円グラフとなる（図30）。

また、これまですべてを総称して剥片と呼称してきたが、ここでは特徴に基づき分類をおこなったため、その定義を示す。まず、剥片がはぎとられた残りの石核にあたるものとクサビ形本体、はがされた側をクサビ形剥片とする。そしてはがされた側でも分厚くまだ剥離調整が可能な分割片をクサビ形削片と呼称する。それらのクサビ形石器に加えて、両極打法が用いられない通常の剥片の4つに大きく分類する。また、各々のタイプをサイズによってさらに細分し、タイプA～Nとして一覧に示した（表3）。表4～6の計測値一覧にある石器タイプの項目のアルファベット記号は、この分類に基づくものである。

また、これらの未完成品に加えて、使用可能な状態にある完成した石器の可能性があるものが1点存在した。しかしながら、この石器は定型的なものではなく偶発的であり、2次的な「加工

表4 出土石器剝片計測値一覧（1）

番号	登録番号	石器タイプ	長さ(cm)	幅(cm)	長幅比	長さ・幅平均	厚み(cm)	重量(g)	備考
1	073	C	5.6	4.6	1.2	5.1	0.9	27.5	接合資料5
2	074	H	5.6	2.2	2.5	3.9	1.0	13.7	図25
3	075	H	5.3	4.0	1.3	4.65	0.8	18.3	図25
4	076	J	4.3	2.4	1.8	3.35	0.8	10.8	図25
5	077	G	4.4	3.1	1.4	3.75	0.4	7.0	図25
6	078	E	2.2	2.5	0.9	2.35	0.6	3.2	図25
7	079	F	3.9	3.2	1.2	3.55	0.5	8.3	図25
8	080	G	4.8	3.6	1.3	4.2	0.9	11.8	
9	081	D	6.8	5.9	1.2	6.35	1.8	72.4	
10	082	C	5.1	4.4	1.2	4.75	1.5	37.6	
11	083	D	6.0	3.3	1.8	4.65	0.9	20.3	接合資料2
12	084	H	5.4	3.1	1.7	4.25	0.6	11.3	図25
13	085	D	5.2	3.9	1.3	4.55	1.0	26.6	接合資料9
14	086	F	3.4	3.9	0.9	3.65	0.4	6.5	図25
15	087	G	4.6	3.4	1.4	4.0	0.5	7.0	図25
16	088 b	G	4.5	4.7	1.0	4.6	0.8	19.9	図25
17	089	J	4.0	2.8	1.4	3.4	0.9	12.1	図26
18	090	J	4.3	2.8	1.5	3.55	1.0	13.3	図26
19	091	F	3.7	3.9	0.9	3.8	0.6	8.1	図26
20	092	B	4.5	3.6	1.2	4.05	1.9	31.0	図26
21	093	B	4.9	3.8	1.3	4.35	1.1	24.7	図26
22	094	G	4.6	3.5	1.3	4.05	0.6	11.2	図26
23	095 a	G	4.0	2.6	1.5	3.3	0.6	5.5	接合資料1
24	095 b	F	3.8	2.6	1.5	3.2	0.3	2.8	図26
25	096	B	4.9	4.7	1.9	4.8	1.2	30.8	図26
26	097	F	3.5	2.6	1.3	3.05	0.7	5.8	図26
27	098	E	2.7	2.2	1.2	2.45	0.4	3.0	
28	099	F	3.2	2.9	1.1	3.05	0.6	5.0	図26
29	100	E	2.1	1.3	1.6	1.7	0.3	1.0	
30	101	F	3.7	2.1	1.8	2.9	0.5	3.8	図26
31	102	L	3.1	3.2	1.0	3.15	0.8	8.2	図27
32	103	G	4.6	3.5	1.3	4.05	0.7	12.8	図27
33	104	F	3.2	2.4	1.3	2.8	0.4	4.1	図27
34	105 b	G	4.9	3.5	1.4	4.2	0.7	16.6	図27
35	106 a	H	5.2	2.7	1.9	3.95	0.7	8.4	図27
36	106 b	H	5.0	3.1	1.6	4.05	0.8	10.5	図27
37	108	E	2.5	3.0	0.8	2.75	0.3	2.7	
38	109	K	5.2	3.9	1.3	4.55	1.3	24.5	図27
39	110	F	3.6	2.7	1.3	3.15	0.5	5.3	図27
40	111	D	6.7	3.3	2.0	5.00	1.1	26.0	接合資料4

番号	登録番号	石器タイプ	長さ(cm)	幅(cm)	長幅比	長さ・幅平均	厚み(cm)	重量(g)	備考
41	112 a	G	4.1	3.0	1.4	3.55	0.7	10.8	図27
42	112 b	G	4.1	3.1	1.3	3.6	0.5	6.1	図27
43	113	H	5.3	3.8	1.4	4.55	0.8	23.0	図28
44	114	D	7.0	2.3	3.0	4.65	1.1	24.1	
45	115	G	4.4	2.8	1.6	3.6	1.0	14.3	
46	116	N	5.2	5.3	1.0	5.25	1.2	218.0	図28
47	117	C	5.2	4.7	1.1	4.95	1.7	34.0	接合資料3
48	119	F	3.4	2.4	1.4	2.9	0.4	2.8	接合資料1
49	120 a	D	5.6	4.2	1.3	4.9	1.0	33.2	接合資料5
50	120 b	G	4.3	2.7	1.6	3.5	0.6	8.9	接合資料8
51	121	F	3.9	3.3	1.2	3.6	0.7	8.7	接合資料1
52	122	H	5.4	4.3	1.3	4.85	0.7	15.9	図28
53	123	H	6.3	4.0	1.6	5.15	1.1	29.0	図28
54	124	B	4.6	4.3	1.1	4.45	1.3	26.6	図28
55	125	D	6.9	3.3	2.1	5.1	1.1	27.1	接合資料9
56	126	B	4.2	4.0	1.1	4.1	1.9	27.4	
57	127	A	3.8	2.1	1.8	2.95	0.5	5.4	
58	128	D	7.2	3.8	1.9	5.5	1.5	39.3	接合資料6
59	129	H	5.6	3.6	1.6	4.6	1.2	25.5	
60	130	F	3.9	2.9	1.3	3.4	0.4	4.5	
61	131	H	5.9	4.2	1.4	5.05	1.0	23.2	
62	132	I	3.4	2.5	1.4	2.95	1.0	10.5	
63	133	H	5.5	3.6	1.5	4.55	0.8	14.8	
64	134	F	3.7	3.2	1.2	3.45	0.7	7.8	
65	135	F	3.5	2.9	1.2	3.2	0.4	4.2	
66	136	F	3.2	3.1	1.0	3.15	0.4	3.1	
67	137	D	6.6	3.7	1.8	5.15	1.3	31.8	接合資料4
68	138	E	2.5	2.4	1.0	2.45	0.4	4.3	
69	139	石器	4.6	2.7	1.7	3.65	0.9	14.8	
70	140	M	4.1	3.4	1.2	3.75	0.8	15.0	完成品
71	141	E	2.0	1.6	1.3	1.8	0.3	0.7	
72	141	E	2.4	1.9	1.3	2.15	0.2	1.4	
73	142	F	3.7	2.6	1.4	3.15	0.7	7.4	
74	143	G	4.6	3.2	1.4	3.9	0.8	17.4	
75	144	G	4.9	2.3	2.1	3.6	0.6	8.1	
76	145	L	3.5	2.8	1.3	3.15	0.7	5.5	
77	146	I	3.5	3.4	1.0	3.45	0.8	11.8	
78	147	G	4.7	4.0	1.2	4.35	0.6	12.1	
79	148	D	7.1	3.0	2.4	5.05	1.3	29.3	接合資料8
80	149	B	4.9	3.4	1.4	4.15	0.8	15.0	図28

表5 出土石器剝片計測値一覧（2）

番号	登録番号	石器タイプ	長さ(cm)	幅(cm)	長幅比	長さ・幅平均	厚み(cm)	重量(g)	備考
81	150	F	3.7	3.4	1.1	3.55	1.2	15.4	
82	151	E	2.7	1.6	1.7	2.15	0.2	1.0	
83	152	F	3.5	2.9	1.2	3.2	0.5	5.4	
84	153	F	3.7	3.1	1.2	3.4	0.5	6.1	
85	154a	E	2.6	2.2	1.2	2.4	0.5	2.2	
86	154b	E	2.7	2.7	1.0	2.7	0.7	3.1	
87	155	B	4.2	3.9	1.1	4.05	1.2	26.4	
88	156	G	4.9	3.2	1.5	4.05	0.5	5.9	
89	157	H	5.8	3.9	1.5	4.85	0.7	13.9	
90	158	H	5.9	4.3	1.4	5.1	1.3	31.8	
91	159	L	3.7	3.3	1.1	3.5	0.7	6.5	
92	160	E	2.7	2.0	1.4	2.35	0.2	1.4	
93	161	J	4.7	4.5	1.0	4.6	1.5	21.7	
94	162	D	6.2	2.2	2.8	4.2	0.5	7.7	接合資料9
95	163	C	5.3	3.9	1.4	4.6	1.4	35.1	図28
96	164	G	4.2	2.6	1.6	3.4	0.6	4.8	
97	165	H	6.2	3.3	1.9	4.75	0.6	10.0	
98	166	H	5.4	2.3	2.3	3.85	0.7	8.2	
99	167	F	3.6	1.9	1.9	2.75	0.4	2.8	
100	168a	F	3.3	3.9	0.8	3.6	1.0	10.0	
101	168b	F	3.7	2.6	1.4	3.15	0.3	2.5	
102	169	D	6.6	4.6	1.4	5.6	1.2	37.3	
103	170	B	4.6	4.7	1.0	4.65	1.3	28.7	
104	171	F	3.8	3.3	1.2	3.55	0.8	7.8	
105	172	E	2.4	2.2	1.1	2.3	0.7	3.8	
106	173	F	3.6	3.7	1.0	3.65	0.8	8.3	
107	174	E	2.4	2.4	1.0	2.4	0.4	2.6	
108	175	B	4.7	3.5	2.0	4.1	1.0	16.9	
109	176	G	4.8	2.2	2.2	3.5	0.8	9.9	
110	177	F	3.8	2.8	1.4	3.3	0.5	4.2	
111	178	F	3.8	2.9	1.3	3.35	0.9	7.7	
112	179	F	3.7	3.1	1.2	3.4	0.3	2.5	
113	180	M	4.5	2.5	1.8	3.5	0.8	7.2	
114	181	H	6.3	2.8	2.3	4.55	0.9	17.3	図28
115	182	D	7.2	4.1	1.8	5.65	1.4	39.6	接合資料6
116	183	A	3.9	3.5	1.1	3.7	0.9	14.8	
117	184	H	5.4	3.5	1.5	4.45	0.9	13.7	
118	185	G	4.1	3.2	1.3	3.65	1.0	14.5	
119	186	G	4.8	3.5	1.4	4.15	0.6	11.5	
120	187	D	8.0	5.2	1.5	6.6	1.5	67.5	接合資料7

番号	登録番号	石器タイプ	長さ(cm)	幅(cm)	長幅比	長さ・幅平均	厚み(cm)	重量(g)	備考
121	188	B	4.1	3.2	1.3	3.65	1.2	12.0	
122	189	L	3.1	2.1	1.5	2.6	0.6	4.2	接合資料7
123	191	E	2.4	2.6	0.9	2.5	0.4	2.7	
124	192	G	4.2	4.9	0.9	4.55	0.7	18.3	
125	193	F	3.6	2.7	1.3	3.15	0.3	2.9	
126	194	B	4.7	4.9	1.7	4.8	1.2	29.5	
127	195	H	5.5	2.6	2.1	4.05	0.7	12.0	
128	196	E	2.9	2.9	1.0	2.9	0.5	4.4	
129	197	M	4.7	2.7	1.7	3.7	0.8	7.5	
130	199	D	8.0	3.4	2.4	5.7	1.5	56.0	
131	200	N	5.5	4.2	1.3	4.85	0.7	18.0	
132	201	N	5.8	5.9	1.0	5.85	1.5	36.5	
133	202	F	3.1	2.6	1.2	2.85	0.5	4.4	
134	203	B	4.9	2.7	1.9	3.8	1.0	14.4	
135	204a	G	4.5	3.8	1.2	4.15	0.9	16.2	
136	204b	G	4.1	3.3	1.2	3.7	0.6	4.6	
137	205	A	3.7	3.6	1.0	3.65	0.9	14.8	
138	206	F	3.5	2.3	1.5	2.9	0.6	4.6	
139	207	F	3.9	2.6	1.5	3.25	0.5	3.8	
140	208	H	5.2	4.1	1.3	4.65	0.9	13.0	
141	209b	H	6.9	3.2	2.2	5.05	1.0	33.2	図28
142	212東下層	F	3.4	3.8	0.9	3.6	0.8	11.3	
143	212東下層	F	3.5	2.5	1.4	3.0	0.6	5.0	
144	212東下層	F	3.6	2.5	1.4	3.05	0.7	6.1	
145	212東下層	F	3.1	2.4	1.3	2.75	0.5	4.2	
146	212東下層	F	3.4	2.2	1.5	2.8	0.4	4.0	
147	212東下層	F	3.3	3.1	1.1	3.2	0.4	5.4	
148	212東下層	E	2.9	2.8	1.0	2.85	0.5	5.0	
149	212東下層	E	2.9	1.9	1.5	2.4	0.7	3.4	
150	212東下層	E	2.8	2.6	1.1	2.7	0.4	3.8	
151	212東下層	E	2.1	1.2	1.8	1.65	0.2	0.9	
152	212東下層	K	5.2	2.8	1.9	4.0	0.5	12.3	
153	212東下層	J	4.4	4.0	1.1	4.2	0.9	15.8	
154	212東下層	J	4.5	3.4	1.3	3.95	0.9	11.9	
155	212東下層	J	4.3	2.5	1.7	3.4	0.5	5.4	
156	212東下層	M	4.9	3.7	1.3	4.3	1.0	13.8	
157	213西下層	I	3.9	3.6	1.1	3.75	0.8	11.5	
158	214西下層	E	2.9	1.6	1.8	2.25	0.5	2.9	
159	214西下層	K	5.9	3.4	1.7	4.65	1.4	29.0	
160	214西下層	I	3.9	3.5	1.1	3.7	0.9	13.7	

表6 出土石器剥片計測値一覧（3）

番号	登録番号	石器タイプ	長さ(cm)	幅(cm)	長幅比	長さ・幅平均	厚み(cm)	重量(g)	備考
161	214 西下層	M	4.4	3.2	1.4	3.8	1.0	9.2	
162	214 西下層	L	3.2	2.0	1.6	2.6	0.5	3.5	
163	中層	B	4.1	3.6	1.1	3.85	1.3	27.4	原位置遊離
164	中層	F	3.9	1.0	3.9	2.45	0.4	1.7	✓
165	中層	F	3.3	2.2	1.5	2.75	0.5	4.9	✓
166	中層	F	3.6	2.2	1.6	2.9	0.5	5.1	✓
167	上層	F	3.2	2.6	1.2	2.9	0.6	5.6	✓
168	上層	E	2.6	2.2	1.2	2.4	0.3	1.8	✓
169	上層	E	2.5	2.2	1.1	2.35	0.3	1.3	✓
170	上層	E	2.0	1.9	1.1	1.95	0.5	2.5	✓
171	上層	E	2.5	2.1	1.2	2.3	0.2	1.8	✓
172	上層	E	2.8	1.8	1.6	2.3	0.4	2.4	✓
173	上層	E	2.4	2.1	1.1	2.25	0.4	2.2	✓
174	上層	E	2.8	2.5	1.1	2.65	0.6	3.2	✓
175	上層	E	2.5	2.2	1.1	2.35	0.5	3.0	✓
176	上層	E	2.6	1.5	1.7	2.05	0.5	1.4	✓
177	上層	E	2.6	0.6	4.3	1.6	0.3	0.6	✓
178	中層	K	7.3	3.0	2.4	5.15	1.1	22.4	✓

痕がある」ということにはすぎない状態のものである（註9）。出土状況をみても、特に他の未製品と区別されていたわけではなく、混在して置かれていた。この完成品（139）もまた、素材剥片をとる段階では両極打法を用いて剥離されている。

石器の分類による比率から、この石器群の顕著な特徴は、両極打法を使用した痕跡のあるクサビの割合がきわめて高いことである。クサビ形本体35点、クサビ形剥片114点、クサビ形削片15点の合計164点で、92%あまりを占める。最大のもので長さ7.2cm、幅5.9cm、厚み1.9cmを測り、平均長は4.27cm、平均幅は3.1cm、平均厚は0.77cmである。また、最も大きなものの重量は218gで、178点の平均重量は14.15g、総重量は2518gを測る。

長幅比の平均は1.5となる。

そのうち接合資料は合計9組24点である（図30・図版29上下）。以下にあげるものうち、計測値一覧（表4～6）にみられないものは、分析の対象外とした長さ2cm以下の碎片である。

まず、接合資料①は119・121・095の3点接合で、3点の剥片が順に水平に重なるように接合する。②は140・083の2点接合で離れた位置から出土した2点が接合した。2点の背面はともに風化した剥離面である。③は117a・117b・118の3点が接合するが、117a以外の2点は碎片である。④は137・111の2点が接合し、ともに背面に原面をもつと思われ、原礫に直接両極技法による打撃を加え、2分された形であろう。⑤は117c・120a・073の3点が接合するが、これも117cはチップ状の碎片である。⑥は128・182の、水平に重なる2点が接合する。この2点は中層と下層にわたって上下で重なる位置から出土した。⑦の189・187は近い位置からの出土で接合した。となりあわせではないが1点おいてとなりのものが接合した。⑧は148・120bの2点が接合した。このうち148は両面に主要剥離面をもつが、これにさらに接合する破片はなかった。⑨は162・125・85の縦長剥片3点が下層からこの順に水平に重なって接合する。このうちもっとも小さい162は背面に著しく風化した剥離面をもち、この資料の作成時における原礫の表面であったようにみえる。

4. 石器剥片集石遺構の類例

このようなサヌカイトの石器剥片が密度高く集積した状態で出土した例は他にもある。今回千里丘遺跡から出土した剥片は、集石以外の地点からの石器の出土ではなく、土器など他の遺物や遺

構も伴わないので、用途や性格、年代の特定がきわめて困難である。それを類推するために、ここに類例を集めてみた（註10）。近畿地方におけるサヌカイト石器の集石遺構については、田部剛士氏の論考に詳しいが（註11）、ここでは、千里丘遺跡の当該資料がアカホヤ火山灰降灰以前である可能性が高いことを念頭において縄文時代の、早い段階に属するもの、クサビ形石器を含むもの、二上山産サヌカイト石器の集石・積遺構として報告されているものに注目してとりあげる。大阪府下を中心に限定したが、類似性の高かった桐山和田遺跡例については奈良県に位置してはいるが、ここにとりあげることとした。

野畠遺跡

まず大阪府下にあり、千里丘遺跡に近接する北摂地域の、豊中市野畠遺跡の例がある（註12）。豊中市北部、千里川左岸の河岸段丘上の標高約45mに位置する複合遺跡である。包含層から多量の石器が出土しているが、2次調査では5-H区と1-L区の2ヶ所においてサヌカイト集石遺構が原礫とともにみつかった。同じ層よりの出土土器から、縄文時代中期後葉の北白川C式から後期前葉の北白川上層式1・2期に比定される。

5-H区ではサヌカイト剝片3点が水平に密着した状態で出土し、うち2点は接合する。この3点はいずれも両極打法を用いたものではないが、隣接する焼土坑から削器や石核、剝片・碎片などとともに、クサビ形石器6点が出土した。1-L区では、長辺23cm、短辺19cmの範囲に18点のサヌカイト素材や石核・剝片などが平面的に集積した状態で出土した。剝辺にはかなり大型のものも含まれ、そのうち3点の縦長剝片に接合関係がみられる。

また、野畠遺跡の出土品の中には、具体的な割合は示されていないが、両極打法を用いて製作された石器とその製作に関わる剝片の出土比率が高く、20点を超えるクサビ形石器、あるいは両極打法が用いられた剝片が図示されている。中には、自然面を表裏に残し、そう大きくない原礫から直接両極打撃を施したと考えられるものも含むといい、これは、前掲の千里丘遺跡の接合資料にもみられる。

集石遺構内の石器群は、節理にそって剥離された大型剝片とそれらを素材とした石核を中心に構成される。野畠遺跡においては石材獲得から石器製作まで一連の作業がおこなわれていたと想定されている。両極打法による剝片と思われるものでも長さが8～9cmを超える大型のものがみられる。千里丘遺跡おいても、大型のクサビ形本体は15点と比較的多く出土するが、最大のものでも長さ7.2cmと、野畠遺跡例には及ばない。

出土状況については、各々の剝片がさほど密着しておらず、隙間にわずかながらも土が咬み、千里丘例とは若干違った様相をみせる。

弓削ノ庄遺跡

その他の大阪府下での類例は、中河内地域が多く、東大阪市弓削ノ庄遺跡、八尾市久宝寺遺跡北地区、大阪市平野区長原遺跡などがある（図31・表7）。このうち、弓削ノ庄遺跡例や久宝寺遺跡北地区例などでは遺構内の出土点数が少ないものの、長原遺跡での集石点数は千里丘遺跡例

に迫る。

弓削ノ庄遺跡は縄文時代晩期末から弥生時代にかけての複合遺跡で、主に集落や墓がみつかっている。ここでは1-60集積遺構と2-89集積遺構の2ヶ所のサヌカイト石器の集石遺構が検出された（註13）。前者は縄文時代晩期末とされる遺構面で検出され、後者はそれよりも若干高い位置の弥生時代前期頃の遺構である可能性が高いという。

1-60集積遺構は、直径約20cmの範囲にサヌカイトの剝片及び石核15点が重なり合って出土し、掘り込みはない。さらに、遺構周辺で取り上げた4点のサヌカイト石器剝片もこの遺構に伴うと考えられている。どれも10cmを超えることなく類似するサイズの剝片ばかりで完成品は含まれない。接合関係が確認された資料もない。最も大きな剝片で長さ6.9cm、幅8.5cm、最も小さなもので長さ4.8cm、幅4.3cmを測る。剝片の中では、縦横の長さがほとんどわらないものが5点と最も多く、縦に長い剝片と横に長い剝片がそれぞれ3点ずつ含まれる。

また、風化面、原礫面を背面あるいは側面の一部に残すものが15点中10点と多く、数は千里丘遺跡例が圧倒的に多いが特徴に共通する点はある。ただ、集石遺構内から出土した15点はすべて、両極打法が用いられたものではない点が決定的に異なる。大きさの類似性や完成品が含まれないことなどから、石器の素材剝片が集石された出土状況であると考えられている。

また、近辺から1点クサビ形石器が出土していると報告される。その石器については、この他にも集石遺構が検出された1調査区8層から側面や表面に自然面を多く残すものが3点出土している。4.5～6.0cmとさほど大きなものではないが、前掲の野畠遺跡例でもみられたように原礫とさほどかわらない大きさであろう。ここでも、両極打法を用いて割られた原礫はさほど大きくないものが含まれていた可能性が高い。

2-89集積遺構は縄文時代の遺構よりは上層で検出されたというため、ここでは詳しく述べないが、同様に掘り込みなどではなく、剝片3点、石核1点の計4点が重なって出土した。

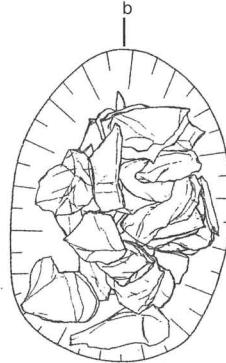
表7 サヌカイト石器集石遺構の類例比較

番号	遺跡名	所在	遺構名	掘込有無	両極打法	接合資料	総石器点数	風化面・原面	最大長(cm)	最小長(cm)	最大幅(cm)	最小幅(cm)	備考
1	千里丘遺跡	摂津市千里丘	石器集石遺構	不明瞭	9割以上	24点	180<	○	7.2	2.0>	4.28		隙間なく密着して重なる 縄文早期以前か？
2	野畠遺跡	農中市西緑ヶ丘	2次調査5H区 サヌカイト集積	無	無	1組2点	3	無					隣接する焼土坑から両極 北白川上層1・2式
3	野畠遺跡	農中市西緑ヶ丘	2次調査1L区 サヌカイト集積	無	無	1組3点	18		10前後	0.8>	8～9	1.5	大きい剝片+碎片 北白川上層1・2式
4	弓削ノ庄遺跡	東大阪市柏田本町他	1-60集積遺構	無	無		15+4	○少	10>				周辺から両極 縄文晩期末～
5	久宝寺遺跡	八尾市久宝寺	サヌカイト集積	無	無	有	11	○	21		15.4		突帯文
6	長原遺跡	大阪市平野区長原	ピット148	有	無		101	○多	7<	2.4>	7.2<	3.2>	49点原面有 突帯文
7	桐山和田遺跡	奈良県山添村	S X 102	有	有	有	65	○多	6.2	1.05	7.0	1.2	57%自然面、57%二次加工 縄文草創期
8	桐山和田遺跡	奈良県山添村	S X 101	有	有	無	24		7.6	2.4			縄文早期

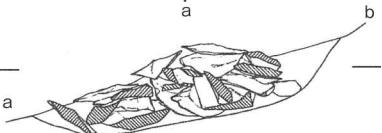


0 10cm

4. 弓削ノ庄遺跡

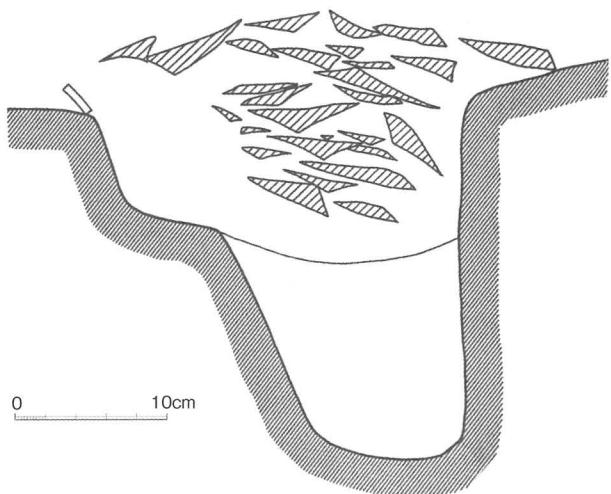
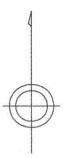
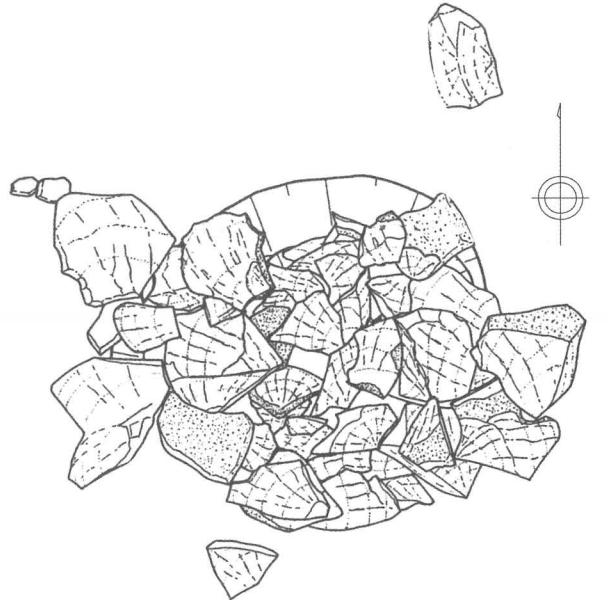


a



b

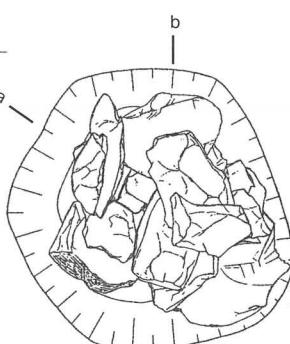
0 10cm



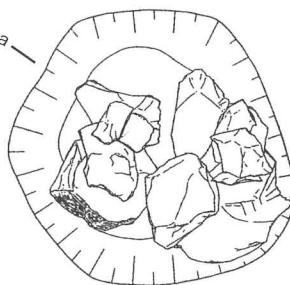
0 10cm

6. 長原遺跡 ピット148

7. 桐山和田遺跡 SX102



b



a



0 10cm

8. 桐山和田遺跡 SX101

図31 サヌカイト石器集石遺構の類例

久宝寺遺跡

久宝寺遺跡は沖積平野に位置し、旧石器・縄文時代から連綿と生活が継続して確認される大規模な複合遺跡である。久宝寺遺跡北地区例では、縄文時代に比定される包含層の中で、石核5点、剝片6片の計11点が集積した状態で出土した。石核と剝片が接合する資料が2組ある。これまで例示したものよりはやや大型の剝片及び石核がも含まれ、最大のものは20cm弱を測る。おおむね10cm弱～15cm弱の範囲内におさまり、ほぼすべてが、側面あるいは背面に自然面を残す。ここで出土した石核が、もともとの厚手の大型剝片から、素材となる小剝片を打ち欠いた状態であると考えられている（註14）。

長原遺跡

長原遺跡例は昭和56年度の調査において、E地区のピット148から出土した集石である（註15）。直径約26cm、深さ27cmの2段に彫り込まれたピットの中に大割されたサヌカイト101点が重なり合って入っていた。ピットは上段が広く、下段は底径が狭くなる2段構造で、ピットの底まで遺物が詰まっているのではなく、2段掘りされた上段部分にのみ集中していた。サヌカイト集石の上面はピットからはみ出て広がっていた。ただ、下段は炭化物を含む土が埋土となり、そもそも2段のピットが掘られたわけではなく、炭化物を含んだものを切ってサヌカイト集石のものが掘られた可能性も示唆されている。

101点の中には、サヌカイトの剝片86点、細部調整剝片2点、石核3点が含まれていたが、両極打法を用いて剝離されたものはみられない。最大長は7cmを超え、最大幅は7.2cmを超える。剝片及び細部調整剝片の計88点における最も顕著な特色は、ほぼすべてが3cmを超える剝片であることである。最小のものでも長さ2.4cm、幅3.2cmを超え、碎片が含まれない。うち66点が完形であり、49点の打面形態が原面打面であるという。このことから、これらの剝片は、原面に覆われた原材をまず大きく剝離した段階での生産物であると考えられている。

また、打撃角の分布の山部が2つにならずに62.7%が $105^{\circ} \sim 120^{\circ}$ に集中することから、これらの剝片はまとまったひとつの性格をもつ生産によるものであることも示唆する。しかしながら、剝片の長さと幅の相関関係にまとまりはない（註16）。すなわち、原礫を一度にまとめて割り砕いた時の生産品で、まだ目的となる製品をイメージした素材剝片になる前段階の大まかな素材剝片がまとめてピットに放り込まれていたということになろうか。

ピットからは縄文土器の細片1点も出土した。第7A層上面の遺構で、突帯文土器を伴う、縄文時代晩期とされる。

桐山和田遺跡

両極打法を用いたサヌカイト石器剝片の集石ということで、千里丘遺跡の例に状況が最も類似するものに、桐山和田遺跡の例がある（註17）。桐山和田遺跡は奈良県山添村に位置する。縄文時代草創期と早期で各々1ヶ所ずつのサヌカイト集石遺構が検出されている。

縄文時代草創期の集石遺構は微隆起線文土器期に属し、石器原材貯蔵として最も古い事例とい

われる。このSX102は、長径19cm、短径13.5cmの橢円形を呈する小規模な掘り込みの内部にサヌカイトの剥片が詰まった状態で検出された。深さ4cm前後の浅い掘り込みの中に65点の剥片が折り重なるようにまとまって出土した。SX102が検出された縄文時代草創期の遺物は、調査地内の2地点に集中してみられる。SX102もその隣接地で検出されたため、田部剛士氏は居住地域であった可能性も考えられるという（註18）。

これら剥片の長さは、最大で6.2cm、最小で1.05cm、平均は約3.5cmとなる。幅は最大で7.0cm、最小で1.2cm、平均は約2.4cmとなる。厚さは、最大で1.0cm、最小で0.2cm、平均は約0.6cm、重量は最大で22.23g、最小で0.37g、平均重量は7.96gとなる。千里丘遺跡例の剥片よりはやや小型である。

前掲の類例と同様に、自然面を残すものが65点中37点、約57%と高い割合でみられる。部分的な調整など、2次的な加工を施したものは14点で約57%、縁辺部に使用した痕跡が認められるものが4点であった。千里丘例で1点製品としているものも、このレベルの調整である。

集石内の剥片の中には、接合する剥片も存在する一方で、複数の原石からなる剥片類が一括されている点も特徴的である。そして剥片には、上下両辺に階段状剥離が見られるなど、両極打法を用いて剥離された特徴が多く報告される。65点の集石でありながら、自然面を有する剥片がこれほどまでも多く含まれ、複数の原礫の存在が示唆されるということは、例えば国府型ナイフ形石器などで通常想定されるような大型剥片を素材としていたのではなく、川原石のような小ぶりの原礫が想定されるのではないか。これについてはまた、千里丘遺跡例との比較の項で後に詳しく述べたい。

この桐山和田遺跡では、縄文時代早期のものと報告される同様のサヌカイト石材集石遺構SX101がある（註19）。直径17cm、深さ約10cmの不整円形の小ピットの中から剥片24点が出土した。各々の剥片が隙間なく密着して折り重なり、剥片の下側のピット底部には約8cmの厚みで黒褐色の土が埋没していた。

これら剥片の長さは、最大で7.6cm、最小で2.4cm、長さ5.0cmを超えるものが13点を小型のものより多く、5.0～7.0cm前後の大きさのものが主体である。厚さは0.2～1.2cm、重量は0.83～47.85gとその幅は広い。直接、接合関係が確認される剥片はない。ただし、同一の原礫から剥ぎとられたものが確認できる一方で、明らかに別個体の原礫が想定できるものも含まれ、SX102例と同様に複数の原礫からなるものであることが想定される。自然面が残り、原礫から剥ぎ取られたと思われる剥片もあれば、小型で2次調整が全くなされていない剥片には剥片剥離時の副次的に得られた碎片と考えられるものもある。自然面を残すものは、原礫の石核とするための調整時に剥離されたものではないかと考えられている。

このSX101例で特徴的であるのは、検出面である縄文時代早期の遺構面において、このサヌカイト石器集石とともに28基を数える礫の集石遺構（礫群）が検出されたことである。この遺構面では径50cm余り～120cm余りの円形もしくは不整円形を呈する土坑が数多く検出された。土坑

内には、石鏃や石皿、土器などの遺物が含まれるものが多くあった。これらに加えて、拳大かやや小さめ～やや大きめの川原石などが集められた集石遺構がある。平面的に集石が広がるもの、炉址のように受熱の痕跡がみられるもの、礫の密度が低いもの、など構造によって3つに分類され、2基を除くほぼすべての礫群が調査地内の幅50mほどのエリアに集中してみられるが、炉址に類似するタイプは特に集中した分布がみられる。これらの礫群からは、土器や石器などの遺物も共伴しており、サヌカイトのクサビ形石器も3点出土している。

千里丘遺跡との比較

類例を各々例示していく過程でも千里丘遺跡と類似する特徴についてはふれてきたが、ここまでこれまでにあげた共通項をいま一度整理してみたい。

まず、ほぼすべての例において共通してみられるのは、自然面を広い範囲で有する剥片が多く含まれることである。これは、集石遺構内の剥片が多くの加工工程を経た剥片ではなく、原礫にきわめて近い、大まかに剥離されただけの状態であることを示唆する。そして、この時期の集石遺構内の剥片については、せいぜい300～400gほどという大型のものではなかった原礫が用いられたと想定される。

そして、類例の中で集石遺構内からの出土剥片に両極打法が用いられていることが確認されているのは野畠遺跡5H区例と桐山和田遺跡例のみである。ただし、弓削ノ庄遺跡例では近接地から複数のクサビ形石器の出土があった。これら3遺跡及び千里丘遺跡から出土した両極打法を用いたサヌカイト剥片に共通するのは、自然面を多くもち、原礫からそう遠くない状態の剥片でありながら、あまり大きくなかったことがある。石核や自然面をもつ剥片から想定される原礫の大きさは5～10cm前後とそう大きくはなく、拳大～川原石大程度であろう。これはやや時代は下るが、例えば八尾南遺跡で出土した原礫ほどのサイズが想定できる（註20）。318gと499gのものがあり、千里丘遺跡例と類似した摩滅した自然面をもつ礫である。それから推定すると、千里丘遺跡出土の180点ほどの約2,500gの剥片の原礫は、単純計算では4～7個、接合しない剥片が多いため剥離されたものすべてではなく、石核・製品となるものが多くぬかれたことを加味しても、6～10個程度と、そう多くなかった可能性が高い。

これは、類例で取り上げた桐山和田遺跡やその他の中河内の遺跡と比較して、千里丘遺跡は石材産地である二上山からの距離も遠く、原材料がそれほど豊富であったとも思えないこととも矛盾しない。そしてこのように、荒割された状態で集石していた千里丘遺跡のサヌカイト剥片ではあるが、実際に素材剥片であり、集石遺構はいわゆるデポと呼ばれる目的的な貯蔵遺構であったのかどうかといった、その目的性については次項で若干の考察を試みたい。

5. 両極打法が用いられていない剥片との比較

両極打法による諸特徴をもった石器は、その性質と用途を考えるうえで、「両極打法によってつくられた道具」であるか、別の目的的剥片を得る際の「楔」として「使用の結果できたもの」

かの2つのパターンが考えられる（註21）。当該資料については、そのすべての法量をグラフに示してみた。それが図32であるが、クサビ形剝片には3cm以下のものも多く含まれるが、それでもまだ剝離が可能な大きさの剝片及び削片・本体が大半を占める。また、少量の通常剝片が含まれながらも、圧倒的多数が両極打法を用いられた剝片であるということから、これらのクサビ形石器が使用の結果できたものであるとは考えにくい。通常の剝片の剝離のために使用された結果のクサビ形石器であるならば、もっと多くの通常の剝片が混入していてもよいはずである。さらに、クサビ形石器自体もまだ繰り返し使用が可能であるこれらの大さきのものが多量に放置されるのは理にかなわないといえよう。それゆえに、筆者はここでは、これらのクサビ形石器は両極打法を目的的に用いて生産されたと考えたいのである。

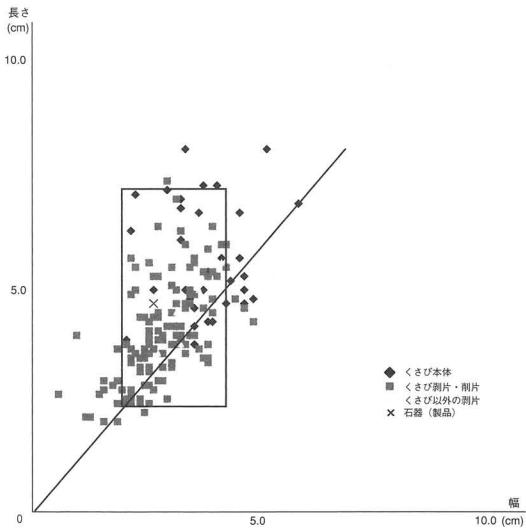


図32 千里丘遺跡 出土石器長幅比

両極打法を意識的に、また排他的に用いて生産されたものであると仮定しても、これらの多量のサヌカイトの集石を、素材となる石材を貯蔵したデポであるとみなすか、素材剝片を選別した後に廃棄されたものであるとみるかは、調査区での関連資料にめぐまれなかつたために、条件づけることは困難である。

そこで、両極打法に注目してみる。その技法を用いることによって、打点が1点のみの通

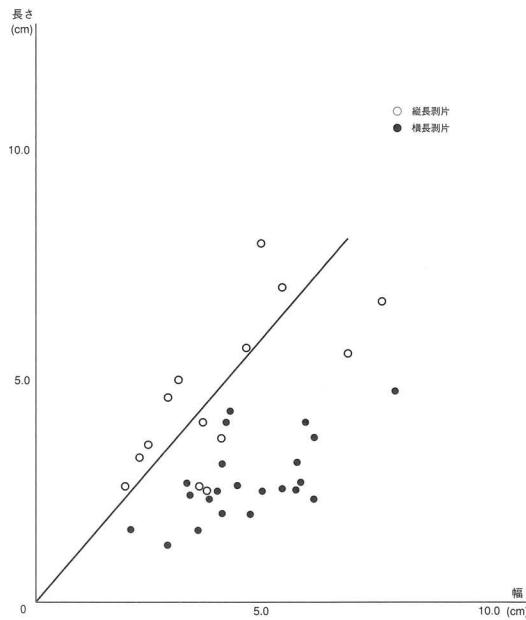


図33 はさみ山遺跡85-7区
出土石器長幅比

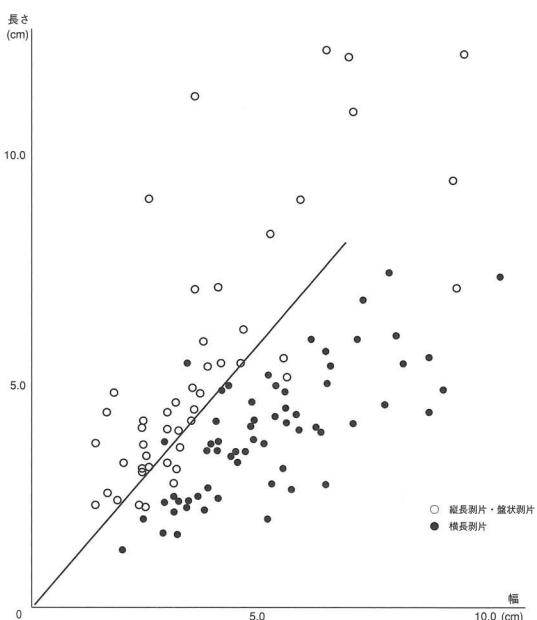


図34 国府遺跡第3地点
出土石器長幅比

常の技法で割られた剝片とどのように差が生じるのか、この千里丘遺跡出土資料の目的性について、さらに裏付けとなる特徴はないかをさぐるために、通常剝片の事例と比較をしてみたい。ここでは比較対象として、大阪府下の代表的な石器出土遺跡である、はさみ山遺跡と国府遺跡第3地点の例をとった。

最も単純ではあるが、わかりやすい比較項目として、その法量及び長幅比を比較してみる。図32の千里丘遺跡例では、長幅比平均は約1.5となり、グラフにおける分布からもみえるように大半が縦長の剝片である。次に、図33・34は各々、はさみ山遺跡85-7区と国府遺跡第3地点から出土した剝片の法量をグラフにしたものである(註22)。縦長剝片と横長剝片がともに出土するが、横長剝片の方が出土量が多い。とくに、国府遺跡例では横長剝片の出土量が縦長剝片を圧倒的に凌駕する。一方の千里丘遺跡例では、横長剝片は数点を除いてほぼみられない。そして図35では、この3つのグラフを重ねてみた。先ほど述べた傾向がより顕著にみてとれる。

国府型ナイフ形石器の素材となる翼状剝片の作成過程をみても、サヌカイトはごく通常の直接打撃によって剝離されれば横長の剝片が剝離される傾向にある可能性が高い。それは、ここでとりあげるはさみ山遺跡85-7区及び国府遺跡第3地点の出土例からも言える。しかしながら、その自然特性とは明らかに一致しない傾向で、千里丘遺跡出土剝片の法量は偏りをみせる。上峰篤史氏は、接合資料の検討から縄文～弥生時代の剝片剝離技術の復原を試み、近畿地方において旧石器時代に盛行した瀬戸内技法をはじめとする剝離技術とは明らかに一線を画することを示している(註23)。千里丘遺跡出土資料に両極打法が用いられている割合や、法量のばらつきが少ないことなどから推察しても、当該資料は故意に一定の法量の縦長剝片を獲得するためにその手法が用いられたように見える。出土資料

は、目的的に剝離され、後に素材として利用されるために集められた一時的な貯蔵構造であるとは言えないだろうか。

6.まとめ

これまで、千里丘遺跡出土の両極打法によって剝離されたサヌカイト石器剝片の集石構造について、類例及び近畿地方で一般的なサヌカイト剝離技術による良好な出土資料と比較することによって、千里丘遺跡において欠落する多くの情報を推察・復原することを試みてみた。ここでまとめに替えてそ

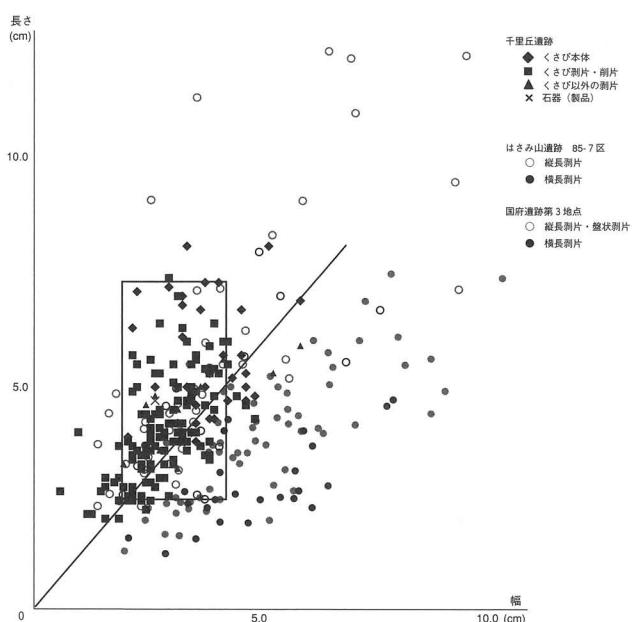


図35 千里丘遺跡・はさみ山遺跡85-7区
・国府遺跡第3地点 出土石器長幅比の比較

の状況を整理することで、本稿を締めくくりたい。

まず、風化の著しい千里丘遺跡出土資料は、自然面は水摩し、剥離面ですら自然面と色などの見分けがつかないほど風化がすすみ、暗灰色～黒に近いサヌカイトの新鮮な状態に近い色合いを呈することが多い弥生時代以降の資料よりは古いものである可能性が示唆される。180点程の出土剥片の獲得には、両極打法が極端に多用され、この剥離技法が故意に排他的に使用されたと言える。そして、その法量分布状況やクサビ形石核なども含まれることから、他の剥片を剥離する際に楔として繰り返し使用された後に廃棄されたコンテキストとしてではなく、目的的にクサビ形石器剥片を獲得するために両極打法を用いたと推察される。これは、通常の剥離技法を用いて生産された剥片との法量及び長幅比の比較によっても、縦長剥片の含有比率が顕著であることからも想定できる。

そして、類例をみわたすと、このような遺構は縄文時代に多くみられることがわかった。その中でも、両極打法剥片を多く含み、出土状況の類似する例は桐山和田遺跡のように縄文時代草創期～早期の例にみられる。このことは、先述のように千里丘遺跡出土資料の風化が著しいことや、出土層が鬼界アカホヤ火山灰の降灰以前に堆積した可能性があることとも矛盾しない。また、すべてが二上山産のサヌカイトで構成されることからも、金山産サヌカイトが近畿地方に一般に流通する以前のものである可能性が高いといえる。

また、類例にみられるこの時期の両極打法剥片は、自然面を有することが多く、原礫からの剥離がそう繰り返しあなわれたものでないことがわかる。千里丘遺跡出土資料のうちで最大長をもつ約8cmの資料は、ほぼ原礫の大きさを推定させるものではないかと考える。前掲の八尾南遺跡出土の原礫にみられるような拳大程度のものが想定される。類例に共通する傾向から、両極打法はさほど大きくない原材から効率的に素材剥片を獲得するために使用された技法である可能性もある。これについては、より多くの両極打法剥片について、自然面を残す資料の含有率、そこから復元できる原礫と獲得された剥離物の法量などの分析の蓄積がさらに必要であろう。今後の検討課題としたい。

そして、千里丘遺跡出土資料が廃棄物であるか、いわゆるデポ（貯蔵遺構）であるかという議論については先述のように極めて目的的であることからも、後者であると考えたい。一括資料は、長さが4cm台中心であり、それらは長幅比が1.4と縦長で、主要剥離面における平坦面のそりが少ないものが多く、その齊一性から選別を経た可能性が高い。一般的に、特に旧石器時代の石器製作においては、素材剥片の獲得から製品の完成までが一連の作業でおこなわれるといわれる。定型化された石器の素材剥片も、一連の行程の中での定型素材であることが想定されている。しかしながら、例えば石核素材にを調整した後に連続して剥片を剥ぎとる、定型の翼状剥片獲得手法では、ある程度大きな原材が必要となる。それに対して当該資料の原材は、前述のようなさほど大きくない礫であることが想定される。従来いわれるような定型化した一連の石器製作に即した素材ではなく、そこから多様な石器へと加工が可能な状態にある、万能な素材としての盤状

剥片素材であると考えたい。その意味で、通常の剥離技法ではなく、小型の原材からでも素材を獲得できる両極打法を目的的に用いて、剥離させた剥片素材のデポであろう。

また、チップの出土は非常に少なく、この場で石器製作をおこなっていたわけではないようであり、製作過程で生じた廃棄物をまとめたものではないといえる。素材の産地である二上山にそれほど近いとも言えない遺跡の立地環境からも、これほど多量のサヌカイトが簡単に廃棄されるとは考えにくい。素材として使うためになら、一旦どこかで粗く剥離したものをまとめて当該遺構検出地まで運び、後に使用するために集石しておいた可能性は考えられる。しかし、廃棄するのならわざわざ運ばなくとも制作の場で廃棄するのではなかろうか。それゆえに、千里丘遺跡のサヌカイト石器集石は保管のための集石遺跡遺構であったと推定したい。 (小川)

石器の観察・同定・所見などについては、山中一郎（京都大学総合研究博物館・当時）・一瀬和夫（京都橘大学）・矢野健一（立命館大学）・絹川一徳（財団法人 大阪市文化財協会）・神野恵・森川実（独立行政法人 奈良文化財研究所）上峯篤史（同志社大学文学部文学研究科）・塚原秀行（立命館大学文学部文学研究科・当時）の諸氏にご教示を賜った。特に絹川氏には詳細にわたる所見とともに石器の分類についてもご教示をいただき、ここでの分類基準は絹川氏のご指摘に基づいて筆者が再考し、データ集成のために計測したものである。上峯氏からは類例についての詳細なデータをご提供いただいた。現場から採取した土壌サンプル及びそれに含まれる火山灰の観察については小倉徹也氏（財団法人 大阪市文化財協会）にご教示をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げますとともに、その他いっさいの誤認や観察不足による間違いについては筆者の責任の負うところにあります。

(註1) 大阪府教育委員会2006『千里丘遺跡群発掘調査概要』

大阪府教育委員会2008『千里丘遺跡』都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査 大阪府埋蔵文化財調査報告2007-3

(註2) 土器片は残存状況が非常に悪く、どのような形のものであるのか同定できる状態はない。ただ胎土や厚みから、縄文土器であるとすれば早期以前のものである可能性もあるとの教示を受けた。一部煤が付着していたため、AMSによる年代測定の可能性を考えてはみたが、絶対量が少なすぎたため分析は叶わなかった。

(註3) この観察手法及び観察結果の詳細については、大阪府教育委員会2008 前掲註1を参照されたい。

(註4) 火山ガラスをHタイプ（扁平型）、Cタイプ（中間型）、Tタイプ（多孔質型）の3種類に分類する吉川（1976）の分類による。

吉川周作1976「大阪層群の火山灰層について」『地学雑誌』 第82巻第8号 pp.497-515

(註5) 筆者にそれを同定する観察力はないが、遺物を実見の上ご教示いただいた方々全員の一一致した意見であった。

(註6) 岡村道雄1983「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究』7 道具と技術 加藤晋平ほか編 pp.106—116

上峯篤史2006「両極打法による剥片剥離実験－異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて－」『旧石器考古学』68 pp.7-28

(註7) 岡村道雄1983 前掲註6。

- (註8) 卷末の写真図版28にある接合資料写真を参照されたい。
- (註9) 分類定義と観察にあたっては、絹川一徳氏にご教示をいただいた。
- (註10) 類例を探すにあたっては、絹川一徳氏及び上峯篤史氏らからさまざまな資料のご提示をいただいた。特に上峯氏からは、独自に収集された二上山産サヌカイト集石・積遺構のデータ一覧をご提供いただいた。
- (註11) 田部剛士2002「縄文時代におけるサヌカイト集積について－石器原材の集積事例から－」『往還する考古学』近江貝塚研究会論集1－例会100回記念－ pp.21-30
- (註12) 豊中市史編さん委員会2005『新修 豊中市史』第4巻 考古 株式会社ぎょうせい
- (註13) 財団法人 大阪府文化財センター2005『弓削ノ庄遺跡他』大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
- (註14) 大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター1992『河内平野遺跡群の動態』V 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 南遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編
- (註15) 財団法人 大阪市文化財協会1983『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- (註16) 財団法人 大阪市文化財協会1983 前掲註15。
- (註17) 奈良県立橿原考古学研究所2002『桐山和田遺跡』大和高原における縄文時代草創期と早期の遺跡発掘調査報告書 奈良県文化財調査報告書 第91集
- (註18) 田部剛士2002 前掲註11。
- (註19) 奈良県立橿原考古学研究所2002 前掲註17。
- (註20) 大阪府教育委員会1993『八尾南遺跡』Ⅱ 旧石器出土第六地点の調査 大阪府文化財調査報告書 第44輯
- (註21) 岡村道雄1983 前掲註6。
- (註22) 図33・34のグラフは、大阪府教育委員会1990『南河内における遺跡の調査』I 旧石器時代基礎資料編 I 大阪府文化財調査報告書第38輯 本文編 第5章の一瀬和夫氏によるものを転載・加筆した。
- (註23) 上峯篤史2009「近畿地方における縄文・弥生時代の剥片剝離技術」『日本考古学』第28号 pp. 1 - 22

参考文献一覧

- 上峯篤史2006「両極打法による剥片剝離実験－異種剝離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて－」『旧石器考古学』68 pp. 7-28
- 上峯篤史2009「近畿地方における縄文・弥生時代の剥片剝離技術」『日本考古学』第28号 pp. 1 - 22
- 岡村道雄1983「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究』7 道具と技術 加藤晋平ほか編 pp.106 - 116
- 加藤晋平・鶴丸俊明1980『図録石器の基礎知識』I 先土器（上）柏書房
- 竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』溪水社
- 田部剛士2002「縄文時代におけるサヌカイト集積について－石器原材の集積事例から－」『往還する考古学』近江貝塚研究会論集1－例会100回記念－ pp.21-30
- 森川実2003「瓜破台地周辺における石器群の様相～原材の搬入と技術変異のあり方について～」『粟生間谷遺跡』旧石器・縄文時代編 （財）大阪府文化財センター pp.279 - 298